

研究課題	地域連携・地域還元根差した自己肯定感向上授業の構築
副題	～様々な ICT 機器を使用した地域連携還元プログラムを通して～
キーワード	
学校/団体名	公立広島市立早稲田中学校
所在地	〒732-0062 広島県広島市東区牛田早稲田四丁目15番1号
ホームページ	https://cms.edu.city.hiroshima.jp/weblog/index.php?id=j1029

1. 研究の背景

本校は生徒158名（1年生51名、2年生58名、3年生49名）の広島市でも小規模の中学校である。令和5年12月末に行った生徒アンケートから「自分の良いところを見つける機会があった」という質問に対して「そう思う」と最も肯定的に回答した生徒は全体で45.6%、「自分の考えや思いを自分の言葉で伝えることができた」という質問に対して「そう思う」と最も肯定的に回答した生徒は全体で52.2%であった。この結果から、約半数以上の生徒が自分のよいところを見つけることができず、思いや考えなどを話すことができていないという現状と課題が見えた。

また、本校生徒を観察していると、授業、行事において決まっていることを実行することはできるが、自分たちで計画し、実行していくことに課題があり、教員の手助けが必要なことが多い。また、地域の方が中学校を大切にしてくれているにも関わらず、地域行事等はあまり参加していない。地域の方が講師として来られて、授業をされた際も、受動的であり、自分からアクションを起こすことができていない。これらは、各学年2クラス、1学級30人弱の小規模の学校であり、1小学校1中学校の持ち上がりの学区のため、中学校入学時には人間関係が固定されており、周りの目を気にして自分の考えや思いを話すことができないという人間関係から来ているものと考えている。

また、本校の学校教育目標である「自ら学ぶ意欲を持っている生徒」、「主体的に問題解決を図ることのできる生徒」、「心豊かに健康でたくましく生きる生徒」の育成に向け、今年度はテーマを「一人も独りにしない生徒が主役の早稲田中学校」として取り組みを行ってきた。これは、生徒が安心して学校生活を送るために、生徒同士のかかわりを大切にしていくというメッセージがこめられている。

これらの背景や学校目標から、中学校へ貢献していただいている地域とのつながりを活かしつつ、卒業後、生徒が地域にできることを考え、計画、実践しながら、実社会で活躍するためにも、授業、行事や総合的な学習を通して、生徒の自己肯定感を高め、ICT機器などを活用しつつ、地域社会で活躍できる生徒を育てていきたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、上記の本校における課題の解決や教育目標の達成のために、以下を目的とした。

(1) 生徒の自己肯定感の向上

本校生徒の課題である自己肯定感の低さの向上を改善する。そのために「3. 研究の経過」にお

ける取組を通して、生徒の意識の改善を行う。検証方法として、学校評価における生徒のアンケート項目中に、「自分の良いところを見つめる機会があった」、「自分の考えや思いを自分の言葉で伝えることができた」等の自己肯定感に関する項目入れ、7月時点と12月時点と比較する。このプログラムを行うことで、この項目の最も良い「そう思う」の割合が12月の時点で向上することが期待される。

(2) 生徒の自己肯定感の向上による循環サイクルが構築

全学年での縦のつながりを意識した地域還元プログラムを計画、実践、検証、再計画を行っていく。その中で、地域の力を借りることや、授業や行事の内容を精査し、高い課題を設定し生徒が主体的になるよう授業や行事を実行する。(詳細は「3. 研究の経過」参照) このことにより、生徒の「地域に役立っている」、「誰かの役に立っている」という実感が生まれる。このことにより、生徒の自己肯定感が向上し、この向上が、次の課題解決に向けてのモチベーショ

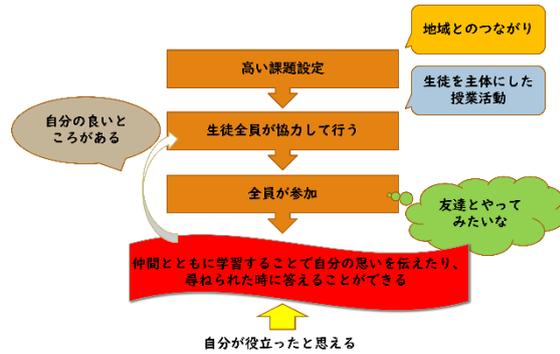


図1：プログラムのイメージ図

ンとなり、好循環が生まれることが期待される。また、この取り組みが、単年度だけで終わらず、今後においても伝統となる地域貢献プログラムとなることが考えられる。(図1)

この検証として、学校評価における生徒のアンケート項目中に、「地域の活動に参加しています。」等の地域と関連した項目を入れ、7月時点と12月時点を行う。また、各行事、授業の振り返りやアンケート結果などの生徒のコメントから、生徒の変容を見取る。

3. 研究の経過

以下の内容で計画を進めた。(表1：研究の経過)

時期	内容 * ()は対象学年	評価方法	備考
4月3日	・昨年度の生徒の実態の報告 ・本研究の目的・計画の確認		* 教員の研修会内での検討
5月17日	・「大窪シゲキの9ジラジ」 DJ 大窪シゲキ様 講演会 (全学年)	・振り返りの内容 (生徒)	
6月14日、21日 7月12日	・地域防災学習(2年生)	・振り返りの内容(生徒) ・授業制作物内容(生徒)	
7月7日～11日	・学校評価アンケートの実施 (教員、全学年、保護者)	・アンケート内容 (生徒、教員、保護者)	
7月20日	・ジュニア防災リーダー活動 への参加(2学年代表)		* ドローンの活用

7月27日	・早稲田学区盆踊り大会への参加（3学年）	・アンケート内容（生徒）	
8月6日	・学校評価アンケートの結果の分析及び今後の計画の検討 ・早稲田自主防災による教員防災勉強会		* 教員の研修会
9月13日、20日 27日	・地域防災学習（3年生）	・振り返りの内容（生徒） ・授業制作物内容（生徒）	
10月26日	・創立30周年記念式典 ・文化祭（全学年）	・振り返りの内容（生徒）	* PA 機器の活用
11月16日	・早稲田公民館祭への参加（代表生徒）		
1月10日、17日 24日	・地域防災学習（1年生）	・振り返りの内容（生徒） ・授業制作物内容（生徒）	

※その他、総合的な学習の時間や各教科の授業においても、購入した機器を活用して本校の学校目標、研究内容を意識し実践を行った。

※ジュニア防災リーダーについては、本校2年生の代表が参加し、7月20日以外の取り組みにも参加している。（詳細については・早稲田自主防災 (<https://www.waseda-jisyubo.net/>) 参照)

4. 代表的な実践

(1) 大窪シゲキ様の講演

5月17日に、広島FMでの人気番組「大窪シゲキの9ジラジ」DJ 大窪シゲキ様に来校いただき、「自分らしく生きるために」というテーマで講演をいただいた。その中で、大窪様の生き方だけでなく、自分の好きなことをどのように行っていくのか、どうしたら自分らしく生きていけるのかなどを講話いただき（写真1）、生徒の感想からは「内容がとても面白く、自分も自信をもって生きていきたい」などの感想が聞かれた。また、これがきっかけとなり、将来、放送業界に関わりたい生徒が番組に出演するなど、生徒の夢をかなえるきっかけとなった。

(2) 早稲田学区防災学習

7月20日に、早稲田自主防災事務局と合同で本校からジュニア防災リーダー、教員が参加してドローンの使用方法の研修と活用について検討を行った。（図1）またこれらを受けて8月6日には本校教員が早稲田自主防災事務局と防災の勉強会を行い、これらを使って地域と中学校が連携してどのようなことができるのか検討を行った。



写真1：講話の様子



図1：ドローン使用の様子（早稲田自主防災HPより）

(3) 盆踊り大会への参加

7月27日に行われた「早稲田盆踊り大会」へ3学年が出店を行った。当日までに、7月上旬までに行った職場体験学習をいかしながら、どのようにしたら体験したことを活かせるのか、物品の購入、当日のシフト計画、出展内容などについてタブレット端末などを使い計画し実施した(写真2)。結果、当日の売り上げは約38,000円、収益は約24,000円となり、この収益から、扇風機のない教室へ扇風機と各クラスにハンディ掃除機を購入し贈呈することができた(写真3)。生徒の振り返りからは、「実際に出店することで、地域の人に喜んでもらえたこと、特に小さい子が楽しそうにしている姿がうれしかった。」「学年が違う先生から、掃除機をありがとうと言われたり、校長先生が全体の前で褒めてくれたことで、やってよかったと思った。」「こんなに売り上げが出るとは思わなかった。みんなが笑顔になれてうれしかった。」などのコメントが見られた。



写真2：出店の様子



写真3：贈呈式の様子

(4) 創立30周年記念式典・文化祭・公民館祭への参加

創立30周年記念式典・文化祭において、自己表現ステージを設け、バンド演奏やダンスなど、希望した生徒が自分自身を表現する場を設けた(写真4)。出場した生徒は自分自身の活動を表現できる場として存分に力を発揮できるとともに、出場しない生徒にとっても友達の新たな一面を知るよい機会となった。振り返りの内容の中にも、「〇〇君たちの演奏がとてもよく、新たな一面を知ることができよい思い出となりました」、「ダンスがすごかった。日頃見る〇〇さんとは違い、クールな一面を知ることができ、面白かった。」など、友達のよい面を発見するきっかけとなった。



写真4：文化祭の様子

また、自己表現ステージに参加した生徒の一部が地域の公民館祭へ参加し、地域へ貢献、自分たちの得意としている分野の発表を行った(写真5)。参加した学校運営協議会委員の方から、「中学生が参加してくれたことで、地域の人にも中学生のことを知ってもらうよい機会となった。また、生徒がいきいきしている姿を見ることができよかった。」といった意見をいただいた。



写真5：公民館祭の様子

(5) 防災学習

以下の計画で地域の防災士の方に来校いただき、各学年での防災学習を行った。

○1学年

実施時期：1月10日、17日、24日

ねらい：災害が起きた時にどのように行動すればよいか考えられるようになる

○2学年

実施時期：6月14日、21日、7月12日

ねらい：災害が起きた時に役立てる人になる

○3 学年

実施時期：9月13日、20日、27日

ねらい：地域で災害が起きた時に、自分たちでできることを考え行動できるようになる

どの学年においても、生徒は真剣に課題と向き合い、最終的には模造紙に自分たちの考えを発表することができた(写真6)。特に2年生では、発表だけでなく、救命救急講習を広島市東消防署の方に来ていただき実際にAEDの使い方を学び、救命救急行ったことで「もし人が倒れていた時に、勇気を出してできるかわからないけど、助けを呼ぶことや、今日の講義で学んだことを思い出して、人を助けたいと思った」、「ドラマでしか見たことがなかったので、はじめは人の胸を押すことに緊張した。思ったよりも力が必要だったので、家族にも今日のことは話をして、いざという時に役立てたい」などの感想が聞かれ、実際に行うことによる効果があったものと考えられる(写真7)。



写真6：生徒発表の様子



写真7：救命救急の様子

また、3年生においては「地域で災害が起きた時に、自分たちでできることを考え行動できるようになる」ということで、避難をするときに助けが必要な人が誰かを考え「赤ちゃんがいる人は、おむつとかがたくさんいるんじゃないかな」、「ペットを飼っている人はどうやったら避難先で一緒にペットと暮らせるんだろう」などの幅広い意見あり、それらを解決するために、どのようにしていけばよいのかなどのアイデアを出し発表することができた。振り返りのレポートの中には「今日出したアイデアが災害が起きた時に採用されているといいな」や「今まで自分たちの避難だけを考えていたけど、避難先では本当に助けが必要な人がいて、そのような人のことまで考えないといけないと思えるようになった。」などの振り返りが見られた。

(6) 授業での活用

地域防災と関連して、3年生理科の「環境分野」で今回の防災に関して、あらためて何ができるのかを考えた。その際に、360°カメラやVRゴーグルを使ってのアイデアを考え、「実際の映像を使った追体験ができるのではないか」、「災害場所を撮影して、映像化するなどして様々な人に見てもらうことはできないか」などのアイデアが出た。日程の都合上、残念ながら3学年では実現できなかったが、これを2年生へと引き継ぎ、VRゴーグルを使って、豪雨災害から避難するイメージを2年生が体験することができた(写真8)。



写真8：VR体験の様子

5. 研究の成果

(1) 生徒の自己肯定感の向上について(アンケート結果から)

生徒の変容を見取することを目的に、学校評価アンケートを7月と12月に実施し、7月には結

果の分析、今後の取り組みに向けた改善、12月は7月からの生徒の変容を見取り、取り組み結果を検証した。

その結果、「自分の良いところを見つめる機会があった。(16.0%上昇) (表2)」、「授業中、自分の考えや思いを自分の言葉で伝えることができた。(6.4%上昇)」、「授業中、提示された課題に積極的に取り組むことができた。(5.1%上昇)」、「授業中、提示された課題に積極的に取り組むことができた。(6.3%上昇)」などの最も肯定的な「そう思う」項目が上昇した。つまり、「高い課題を設定する」→「生徒が全員で協力して行う」→「全員が参加する」→「仲間とともに学習することで自分の思いを伝えたり、尋ねられた時に答えることができる」→「自分が役立ったと思える」→「自分の良いところがあると考えられる」というよい循環ができているのではないかと考えられる。この結果、生徒も安心して学校生活を送っていたのではないかと考えている。

特に印象的であったのは、文化祭の自己表現ステージに参加した生徒が「自分たちの夢をかなえてくれた」というコメントを卒業前の思い出アンケートに書いていたことが印象的であり、教員に丁寧にお礼の手紙を書いてくるなど、今回の取り組みが生徒にとってよいものであったことがわかった。(写真9)

(2) 地域との連携について

地域との連携プログラムから、例年行っている防災学習だけでなく、今年度は盆踊り大会や防災ジュニアリーダープロジェクトにも中学校が積極的にかかわることができた。

3年生の卒業に向けた思い出についてアンケートを取ったところ、地域の欄に関して「ジュニア防災リーダーとして地域の人と地域について楽しく学べた。ジュニア防災リーダーで秋祭りにカレーを作ってあげたことが思い出。そしてこれらの取り組みをほめてもらえてうれしかった。」、「ボランティア活動を通して地域の方々はみんな早稲田を大切にしていこうという共通点があることを知りました。」「盆踊り大会などの祭りで、優しい人たちがばかりでいい街だと思った。」、「防災の授業で、ゲームをしたり発表して、楽しかった。」などの防災学習や盆踊り大会への参加が生徒にとって良い取り組みであったことがわかった。

(3) 教員のICTを使った授業への取り組みの変化

本研究の目的ではなかったが、この取り組みを通して、教員側のICT機器に関して「使ってみよう」という意識の変容が見られた。数値的な変容としては、昨年度の課題や資料の掲示などに使われるclassroomのトピックの回数(課題設定の提出や資料の配付)が昨年度と比べて約2倍近く使用されていた。それに合わせて、生徒のICT機器の回数が増えた(写真10)。

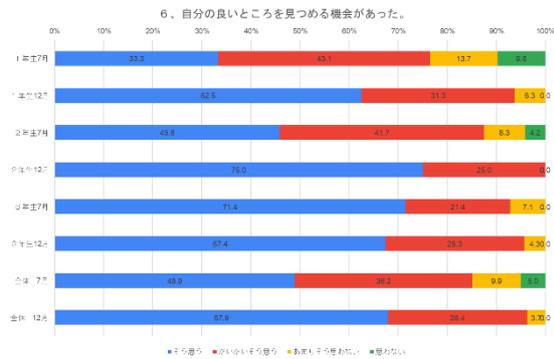


表2: 「自分の良いところを見つめる機会があった」のアンケート結果

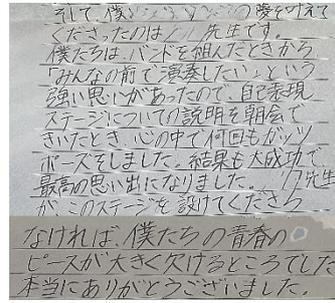


写真9: 生徒の手紙

特に課題の提出については全学年共通して夏休みの日記をスプレッドシートへ書きこみ、日々の生徒の様子が見えた。それに対して教員がコメントをすることができ、生徒の思いがリアルタイムにわかるなどの教員、生徒両方にメリットがある形となった(図2)。また、職場体験や入試等において帰着連絡を電話で行っていたが、google form による報告に切り替えたことで、電話を待つ必要がなくなっただけでなく、その日のうちに生徒の報告書を見ることができ、翌日に生徒に対して報告書内容の評価などを返すことができるなど、ICTのメリットを活かせるようになった。



写真 10：理科・分解者の発見・撮影

その他にも、授業での活用や、防犯学習における不審者対応において、今回購入した GoPro を教員がつけて不審者を追うことで、不審者を追わない教員も追体験ができるのではないかとというアイデアが出た。実際に GoPro をつけて担当教員が撮影を行い、映像を確認したことで、様々な教員が自分たちの不審者対応を振り返るよい機会となった。



図 2：長期休業中の日記のやり取り

6. 今後の課題・展望

(1) 課題について

① 3年間を見通した活動の設定

今回の取り組みを通して、各学年の授業に活用することができ、様々な活動が生徒の自己肯定感の向上につながる結果となった。地域とのつながりでは、防災学習を全学年実施することができ、貴重な経験となった。その一方で、各学年の取り組みが3年間を見通しを持つようにイメージをしているが、そこに向けて意識よりも、現学年に向けてものが多く、次年度以降の計画や見通しを立てて行うことに難しさを感じた。特に、来年度に向けて教員組織が変わった際に、引継ぎができるのか、地域との連携についても内容を理解し、実施できるのか不安を感じる教員もいる。

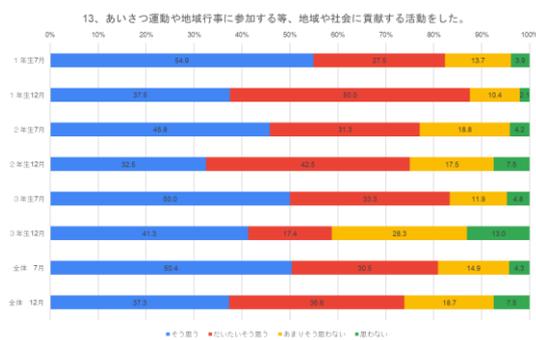


表 3：「あいさつ運動や地域行事に参加する等、地域や社会に貢献する活動をした。」のアンケート結果

また、地域で活躍できるように工夫をしたが、アンケート結果から「あいさつ運動や地域行事に参加する等、地域や社会に貢献する活動をした。」という項目では、肯定的な意見が下がっている(表3)。時期的なものがあるかと思うが、地域へ出ていくという取り組みの年間を見通した工夫が必要である。

②機器の活用

今回ドローンやVRシステム、360°カメラ、PAシステムといった一般家庭にはないような高度なICT機器を使用した。ICT機器に慣れている教員がリードする形で実施し、様々な活用方法のアイデアが出た一方、使用が使用方法を理解している教員のみになり、全体への広がりが難しかった。特に、360°カメラとVRゴーグルについては、予定では地域の防災と結びつけるところまで行う予定であったが、地域との日程調整や場所の確保、各学年の授業の都合、学校セキュリティ関連によるWi-Fi接続ができない、アプリを落とせないなど様々な要因があり、十分に活用することができなかった。来年度、この地域防災と関連した形で使用できないか検討をしていく必要がある。

(2) 今後の展望について

来年度に向けて、生徒の自己肯定感の向上に向けての取り組みは行いつつ、地域との連携を含め、以下のことを工夫していくことを検討している。

①中学校・地域とも無理のない3年間を見通した連携・活性化

今年度の取り組みにおいて、上記の課題のように、各学年単独になる部分がある。その解消のために、年度の早いうちに地域と協議を持ち、今後の中学校との地域連携の在り方や、年間を通じた地域と連携した取り組みなどを検討する。その中で、どのようなあり方が中学校、地域ともよいかを見出し、地域で生きる中学生を育てられるようにしていきたい。

②ICT機器の活用について

購入したICT機器に関して、ドローン、PAシステム以外は活用が難しかった。年度の早い段階で、使用方法の研修などを行い、各教科や学年などにどのように取り入れていけるのか検討を行う機会を設けたいと考えている。

7. おわりに

本研究において、本校のキャッチフレーズである「一人も独りにしない 生徒が主役の早稲田中学校」の大きな成果があった。その一方で、持続可能な取り組みとして行うには改善の余地も見られ、今後も研究が必要と感じた。最後に、ご講演いただきました「大窪シゲキの9ジラジ」DJ 大窪シゲキ様、本校と連携いただきました「早稲田学区社会福祉協議会」様、「早稲田自主防災事務局」様へ感謝申し上げます。

8. 参考文献

- ・佐藤 学 (2023) 新版 学校を改革する 学びの共同体の構想と実践 (岩波ブックレット)
- ・山口 晃弘 (2023) 中学校理科がもっと楽しくなる一人一人端末の活用 (東洋館出版社)
- ・地域ポータルサイト こむねっと ひろしま 早稲田学区
<https://www.com-net2.city.hiroshima.jp/02waseda/>
- ・早稲田自主防災
<https://www.waseda-jisyubo.net/>